

〈翻訳〉

A.C. ピグー 「善の問題」 (1908年)

— 邦訳と解題 — *

On Pigou's “The Problem of Good” (1908) : a Japanese Translation

本 郷 亮

This is the first Japanese translation of A.C. Pigou's article, “The Problem of Good” [Pigou 1908a, chap. 4]. The article will be considered to be of vital importance when we attempt to study Pigou's ethical thought which underlies his welfare economics. It is recognized that his welfare economics is based on utilitarianism, which, in general, is correct, but the article shows that Pigou was largely influenced by H. Sidgwick who had intended to reconcile utilitarianism with other schools of ethical thought.

Ryo Hongo

JEL : B13

キーワード : ケンブリッジ、厚生、シジウィック、哲学、ピグー、ムーア、倫理学

Keywords : Cambridge, ethics, Moore, philosophy, Pigou, Sidgwick, welfare

はじめに

厚生経済学の確立者として知られるピグー (Arthur Cecil Pigou, 1877-1959) は、それに先立ち、哲学・倫理学の分野において2冊の本 [Pigou 1901a; 1908a] と3本の論文 [Pigou 1906; 1907a; 1907b] を書いた。これらのうち、彼の厚

* 本研究は JSPS 科研費 (22330064, 23730207) の助成を受けたものである。

生経済学の依拠した倫理思想を探るうえでおそらく最も重要なものが、論文集『有神論の問題』[Pigou 1908a] の第 4 章「善の問題」(“The Problem of Good”) であり、本稿はその邦訳と解題である。

ピグー厚生経済学の倫理的側面に言及した研究は非常に多いが、それらのほとんどは冒頭に挙げたような倫理学文献を参照せず、むしろ『厚生経済学』(Pigou 1920) に代表される経済学文献(そのなかに散在する倫理思想の断片)を参照するに留まっている。そのためピグーの倫理思想は、過度に単純な形で誤解されることも少なくない。本稿の意図は、「善の問題」の訳業を通じて、そのような通俗的解釈に一石を投じることにある。

本稿で論じられる「善」は、あくまでも個人の心のうちに宿るものだが、それらが集まって、「厚生」(welfare) という社会的概念が形成される。経済学史の通説によれば、ピグー厚生経済学=旧厚生経済学は、(社会の総効用の最大化をめざす) 功利主義思想に基づく実践経済学であり、経済学と功利主義思想の結合を示す 1 つの典型である。この通説は、必ずしも誤りではない。しかしながらピグーが単純な功利主義者でないことは、「善の問題」を実際に一読すれば、おそらく誰の目にも明らかだろう。

凡例として、以下のことを述べておく。

1. 原文のイタリック体は、訳文ではゴチック体で示した。その必要がないと思われるラテン語慣用句は通常の書体で、また書名の場合は『 』で示した。
2. 訳文中の () は原著者のものであり、[] は訳者の補足である。
3. 原注は 1, 2, 3 … で示し、訳注は [1], [2], [3] … で示した。
4. ピグーは参照した書物の版や出版年を省略することが多い。明確に特定できたものについては適宜補ったが、特定できないものについては、便宜的に初版の出版年を記し、その箇所には下線を引いた。

《邦訳》

善の問題

「善」という語は、日常生活では、まったく異なる2つの意味で用いられる。すなわちそれは、ときには「絶対的な、それ自体としての善 (good absolutely and in itself)」を意味し、またときには「そうした絶対的善であるものを促進する手段として役立つもの」を意味する。本稿で扱うのは、この後者の意味の善ではない。ここで扱うのは、もっぱら「それ自体として善い」ものに関する幾つかの論争的問題である。

それらの問題は3種類に大別される。すなわち、(1) 倫理学の研究方法をめぐって、専門家の中に論争がある。(2) 同じ研究方法をとる専門家の間でさえ、意識を有する者 (conscious being) の善さを構成する要素が何であるかをめぐって、論争がある。(3) ある者の善と他の者の善との関係をめぐっても、論争がある。以上のように大別された3種類の問題は、ある程度まで互いに関連しあうが、ここでは便宜上、それぞれ個別に考察する。

I 【善を把握する方法】

まず研究方法について考えよう。

倫理学者が「善とは何であるか」という問題を研究するさい、2つの主な方法がある。1つは、その事物の性質からの演繹というア・プリオリな方法であり、もう1つは、直接の知覚 (direct perception) という方法である。

ア・プリオリな方法を説明するには、具体例を出すのが一番である。①グリーンは『倫理学序説』(T.H. Green, *Prolegomena to Ethics*, 1883) において形而上学的議論を展開し、人間精神は時間を超越した (timeless) ものであると論じた。そしてこのことから彼は、幸福のような一時的事柄は時間を超越した人間精神の観点からは善になりえない、すなわちより一般的に言えば、時間に制約される一切の事物は善になりえないと論じた。②同様の考え方としてテニスンも、永遠に存在するものしか善になりえない、と示唆している。

善、真実、純粹、公正、
そこから「永遠」という魅力を剥ぎ取れば、一体何が残るだろう^[1]。

最後に、③理由も述べることなく即座に、善はただ 1 つでなければならない、と断定する者もいる。

以上の①～③の典型例が示す研究方法は、その提唱者たちの権威にもかわらず、不毛なものであると思う。まず①のグリーンズの議論には、明白な形式的誤謬が含まれるだろう。すなわち、たとえ人間精神が時間を超越したものであるにせよ、何かが**存在する** (*is*) という前提から、他の何かが**善である** (*is good*) という結論を導くことには、論理の飛躍があろう。また②のテニスンの研究方法も、大きな困難を伴っている。すなわち「善も美も、いずれ消え去る定めにあるうとも、だからといって、それらが傷つくだろうか」。

私はこう問いかける。善いものとは、はかないものか。
だが時の流れを責めても、仕方のないこと。

善は 1 つでなければならないという③の主張も、まったく説得力がない。善は 2 つであってもかまわないし、あるいは 7 は聖なる数だから、7 つであってもかまわないだろう。要するに、何が善であるかをア・プリオリに決定しようとする研究方法は、私にはどれほど有害無益であるように思われる。「色や味は、ただ思考するだけでは把握できない。同様にして善悪も、ただ思考するだけでは把握できない¹⁾」。善を知る唯一の方法は、実際にそれを見ることである。人間には、事実 (*reality*) の世界と構想力 (*imagination*) の世界がある。前者の世界を魂という目で見ることによって、人は黄や赤といった色を知り、同様の方法によって、人は善悪を知る。これこそが善悪を判断する唯一の方法である。知覚の目がより鋭敏になるほど (必ずしもその精神的能力をより一生懸命に用いるという意味ではない)、その判断力も高まる。したがって、本稿

[1] テニスン (Alfred Tennyson, 1809-1892) の詩 “Locksley Hall” より。

1) ロツェ 『ミクロ・コスモス』 (Lotze, *Microcosmus*) 英訳版, 第 2 巻, 357 頁。

の冒頭で示した3つの論争的問題の第1のものについては、私は迷うことなく、[直接の] 知覚に基づく方法を支持する。さて、[次節で扱う] 第2の論争的問題は、この方法の適用の仕方をめぐるものである。

Ⅱ 【意識活動の状態としての善は、いわば多変数関数である】

多くの倫理学者の考えによれば、善いものは、意識活動の状態 (states of conscious life) のみである。しかしこの見解が当然の全称命題として主張される場合には、善いものに関する知識はそれを知覚することによってのみ得られると考える者は、この見解を拒否するはずである。なぜなら、存在するすべての善を人間がごとごとく知覚するという保証はなく、またそのような保証がないとすれば、善に関する唯一の排他的説明をおこなうことなど人間にはできないからである。だが、次のように言うことはできる（その限りにおいて私は上述の見解を受け入れる）。すなわち、われわれが現在認識している善いものは、意識活動の状態のみである。ところが、有名な「有機的善 (organic goods)」の学説を唱える G.E. ムア氏とその信奉者たちは、この見解を批判している。ムアの学説は、なるほど一部の事例には非常によく妥当するように見える。例えば次のことは、一見明白であるように見える。すなわち、善人であると信じて悪人を愛する、あるいは美しい絵であると信じて下手な絵を愛するある人の状態は、本当の善人、あるいは本当に美しい絵を愛する状態よりも悪い。もしそうであれば、善は意識の状態のみに存在するのではなく、意識の状態と（意識されてもされなくても）それが関係する対象の状態との複合体 [有機的統一] である、ということになる。しかし私は、次のように整理すれば、この見解の妥当性は崩れると思う。すなわちある人が善人であると信じて悪人を愛するとき、その人は、①対象の性質を正しく把握したうえで、誤ってそれを善であると判断したのかもしれないし、②対象の性質を誤って把握してしまい、その想像上の性質を善であると正しく判断したのかもしれない。このどちらかだろう。①の場合、その人の誤りによって物事が悪になることに、私は同意する。だがここでは、誤りはすべてその人の意識内の事柄の関係に起因するのであり、その人の意識と [外的] 対象との関係に起因するのではけっしてない。

一方、②の場合、その誤りは後者の関係に起因するが、私は、そのような誤りによって物事が悪になるという考えを拒否する。より一般的に言えば、善は意識活動の状態のみである（ただし意識の範囲は現在までの経験に制限される）という見解と対立する限りにおいて、私は [ムアの] 有機的善の学説を拒否する。この結論に対しては反論の余地も大いにあるが、私はそうした議論を割愛し、以下ではその結論は承認されたものとして話を進めよう。

さて次に、どんな種類の意識活動が善であるかと問うならば、さらに激しい論争が直ちに生じる。それを判断する可能な方法は、人々（われわれがその人々を正しく認識しているか否かを問わず）を観察して、具体的全体としてその善さを直接に判断することだけである。これをやり遂げるのに必要な十分に広い経験をわれわれが積んでいる場合には、その人々の意識の善さを決定すると思われるさまざまな要素やその決定のされ方を、解明できることもあるだろう。もしそれができるならば、われわれの理解はある程度まで単純かつ明確なものになる。そのために従来なされた最も大胆な試みは、全体としての意識状態を構成するさまざまな要素からどれか 1 つの要素を選び、これこそが意識状態の善さを左右する唯一の要素であると主張することだった。この選ばれた要素の変化は、たとえごくわずかなものであっても、意識状態の善さを左右するが、他のすべての要素は、どのように変化しようとも、意識状態の善さを左右することはない。

例えば、(1) 功利主義者は、意識状態の善さを決定する唯一の要素は、そこに含まれる快樂の量であると主張する。また (2) マーティナー博士は、人間の意識内には「動機 (springs of action)」の高低の序列があることを見出し、次のように主張した。すなわち、いつの時代でも人間の善さは、対立しあう 2 つの動機のうち一層高いと判断される方の動機に従って行動するか否か、という点だけで決まる²⁾。ただし實際上、そうした動機は、明白に一層高いものとして判断される必要はない。なぜなら善意 (good will) は、義務感を動

2) 『倫理学の諸類型』(James Martineau, *Types of Ethical Theory*, 2 vols, 1885) 第 2 巻, 237 頁と 286 頁。また同様の見解として、『政治の諸理論』(Green, *Political Theories*) ix 頁も参照のこと。

機とする葛藤的な行動選択の場合に劣らず、愛情を動機とする自然的な行動選択の場合にも伴うからである。だから、良心が故意に抑え込まれたり無視されたりしなければ、それで十分である。最後に、(3) さらに別の学派の考えによれば、善を決定する唯一の要素は愛情 (emotion of love) である。

知識 (knowledge) の価値は、何によって正しく評価されるのか。

知識は力強い。しかし愛は優しい。

そうだ。愛のほかに重要なものなどありえず、

知識のもたらす進歩とは、ひとえにこれを悟ることに尽きる。

なぜなら愛こそがすべてだから。

むしろ、次のことは理解すべきである。すなわち、以上の3つの倫理学説はいずれも、究極的善を決定する唯一の要素（これが何であるかは立場によって異なる）以外のすべての要素は**あらゆる意味において無意味である**、という極論を述べているわけではない。彼らも十分に認めているように、これらの他の要素のなかにも望ましいものがあり、善を促進する**手段として**それらは高められるべきである。例えばシジウィックは、善意が社会秩序の安定に役立ち、それゆえ幸福をもたらすという理由から、善意は間接的に非常に重要なものであると考えた。また善意を重視する者や愛を重視する者も、少量の快楽の意識は善意や愛などの要素の発達を促す、ということを確認している。問題はこれらの学派がいずれも、全体としての意識状態のそれ自体としての善さ（手段としての善さではない）を、たった1つの要素のみによって決定されるものと見なしている点にある。

すでに述べたように、それ自体として善いものに関する命題を判断するためには、[その善いものを] 知覚するしか方法はない。また前述の3つの学説はいずれも、次のように述べている。すなわち、当初の意識状態がどんなものであるにせよ、善を決定するその唯一の要素を除く他の要素の量に変化しても、意識状態の善さはまったく影響を受けない。それゆえ、われわれがこのことを

納得するためには、多くのさまざまな当初の意識状態を考え、その各状態のもとで諸々の要素が変化する場合を、網羅的に考察する必要があるだろう。

それをおこなえば、意識状態に含まれる幾つかの要素は、意識状態の善さとは無関係であることが判明するように思われる。例えば知力 (intellectual power) という要素は、意識状態の善さとは無関係であるように思われる。知力は、物的富を増大させ、それゆえ幸福を増大させるし、また知力があれば、それをもつ者の意識状態全体の善さを高めるような (知力に関連した) 感情や意志を生みだせるようになるので、知力は実際のところ、善への手段にすぎない。しかし知力のもたらすそのような結果ではなく知力自体に注目するならば、それは、それをもつ者の意識状態の善さをまったく左右しないように思われる。メーテルリンクの次の言葉は、もつともであると思う。「思考 (thought) 自体に、決定的重要性はない。重要なのは、人間の生活を高貴にし、またそれを輝かせる思考によって、人間のうちに呼び覚まされる感覚 (feelings) である」³⁾。

ところがその他の要素については、事情はまったく異なるように思われる。意識状態に含まれる①快楽、②善意、③愛情、が変化すれば、意識状態の善さは必ず変化する。しかも善を左右するのは、これら 3 つの変数だけではない。私はそこに次のものも含める。すなわち、④人が抱く理想 (ideals) の性質、⑤人や事物のなかに見出される性質 (その対象の知覚できない真の性質は無視してよい) に対する姿勢、⑥その姿勢が愛情や善意でない場合には、人が自分自身のために立てた目標に対する情熱 (enthusiasm)、である。以上の事柄については、その正しさを証明することはできず、またその誤りを証明することもできない。なぜなら私はただ、私が知覚した事柄を詳しく述べたにすぎないからである。これに対する反論としては、あなた方が知覚した別の事柄を詳しく述べることしかない。

ここまでの考察から言えるのは、意識状態の善さは、数学的に言えば、多変数の関数であるということだけであり、私はその変数の一部を特定しようとしていたのである。この関数の性質について、さらに何か知ることはできるだろう

3) メーテルリンク『智恵と運命』(Maurice Maeterlinck, *Wisdom and Destiny*) 英訳版、1898年、279 頁。

うか。すなわち第1に、それらの変数のすべてが、あるいは1つが増加するとき、常にその関数も増加するだろうか。第2に、それらの変数の符号によって、その関数の符号も一般に決定されるだろうか。第3に、今述べた2つのことが否定される場合でも、われわれはその関数について何らかの一般命題を定められるだろうか。これらは難問であり、それらについて私がここで述べることは、純粹に個人的な意見にすぎない。

まず第1の問題については、とりわけ以下のことを主張できよう。

(1-a) 意識状態に含まれる快楽の量が増加すれば、どんな場合でも、意識状態全体の善さは増加する、と言われることがある。しかし私は、このことが普遍的に正しいとは思わない。故意に悪い行動 (evil-doing) をしている状態もありうるからであり、それによって一層幸福 (happier) になったとしても、意識状態は善くなるどころか悪くなるだろう。

(1-b) 人が自分の理想を追求する情熱 (enthusiasm) の増加によって、その人の善さは常に増加する、と言われることがある。もし意識されたその理想が実際に価値のあるものであり、本人もそう思っているのであれば、そうした情熱の増加によって、確かにその人の善さは増加するだろう。また本人はその理想に価値があると思っているが、実際には価値がないという場合でも、おそらくその情熱の増加によって、その人の善さは増加するだろう。しかし私は、ブラウニングの次のような見方を受け入れることには躊躇する。すなわち彼によれば、悪を認識しながらあえてそれを望むときでも、生半可な気持ちではなく、ひたむきにその道を進む方が善いとされる。「こうして憎しみを晴らすことが彼にとっては本望であったから」、グイードー伯^[2]はその憎しみの深さによって善に近づいた、と本当に言えるだろうか。

(1-c) 愛の強さが高まることによって、意識状態の善さは常に増加する、と言われることがある。もし意識されたその対象が実際に愛するに値するものであり、それを愛する本人もそう思っているのであれば、愛の強さが高まることによって、確かに意識状態の善さは増加するだろう。必ずやそうなるに違いない。

[2] グイードー伯 (Count Guido) は、ブラウニング『指輪と本』(Browning, *The Ring and the Book*, 4 vols., 1868-69) に登場する殺人者である。

前述の第 2 の問題については、以下のような 3 つの一般的議論ができよう。(2-a) たとえわずかでも苦痛が快楽を上回っていれば、その人の意識状態は全体として必ず悪いものになるという意味において、快楽は意識状態の善さにとって不可欠である、と言われることがある。これは私なりに言い換えれば、快楽という変数の符号が負であるときには、常にその関数の符号も負になるということである。私はこの見解を受け入れないし、またこの見解が「世間一般の人々」の倫理的判断に合致するとも思わない。

(2-b) 善意が存在するならば、全体としての意識状態は常に善いものである、と言われることがある。これは私なりに言い換えれば、善意という変数の符号が正であるときには、常にその関数の符号も正になるということである。私はこの見解もやはり受け入れない。なぜなら、もしある人が極端な苦しみを被っている、あるいは嫌悪感を催させるような理想を追求しているならば、その人の全体としての意識状態は、その善意にもかかわらず悪いものになるかもしれないからである。

(2-c) **人が良心の光に逆らって故意に罪悪を犯す場合のように**、もし善意が欠けているならば、その人の意識状態は全体として常に悪いものになる、と言われることがある。これは言い換えれば、善意という変数の符号が負であるときには、常にその関数の符号も負になるということである。この見解は、(2-a) や (2-b) よりずっと妥当なものであり、おそらくカントが、善意は**唯一の善**ではないにせよ、**唯一の無条件の善**であると述べたときに、彼の念頭にあった考えに近い。それでも、この一般命題でさえも疑わしいものになる、極端なケースを考えることは可能である。例えば、厳格で、おそらくは不合理な、義務の規則に従わなければならないある人がおり、その規則の元来の根拠であった他者への思いやりの念 (sympathy) が今でも多少は残っているような場合を考えよう。そのさい、もし高揚した思いやりの念が、そうした機械的良心、すなわち歪められている良心に打ち勝つならば、その人の意識状態は全体として悪いものになるだろうか。私は、常にそのように悪いものになると断言できるのか否か、疑問に思う。

最後に、第 3 の問題が残っている。意識状態のなかに存在する善の量を決

定する関数の性質について、何か一般命題を定めることはできるだろうか。私は、次のように言える場合もあると思う。すなわち (3-a) ある要素 A の現在の量が大きいほど、他の条件が等しい限り、他の要素 B の一定の増加がもたらす、意識状態の全体としての善さの増加は大きくなる。私は、このことが幸福 (happiness) と美德 (virtue) の関係に妥当すると思う。しかし、これ以外の一般命題を定めることができるか否かは疑問である。

Ⅲ 【個人間の対立】

第3の論争的問題の考察に進もう。これは次のような問題である。人はだれもが意識の主体であり、したがってだれもが善の担い手である。その場合、A 氏の善は、B 氏の善や C 氏の善と競合しないだろうか、という疑問が生じる。

この問題に対する答えはむろん、善が何に存すると考えるかという前節の問題にも依存する。幾人かの著者、特に T.H. グリーンは、善が競合することはありえないとし、またそのようなものとして善を説明する。このグリーンの見解は、例えば A.C. ブラッドレー (Bradley) 博士によって、端的に次のように要約された。「目的の観念、すなわち道徳的善の観念は、それゆえ自己実現の観念である。しかもここで言う自己とは社会的存在であり、それゆえ自己の善には他者の善も含まれる。つまり他者もまた、それ自体として目的であると考えられる」⁴⁾。ロフトハウス (Loftouse) 氏はこの考えをさらに明確化し、次のように示唆している。すなわち、愛はそうしたさまざまな善の主体を1つに結びつけるだろうから、A の善を高めようとすれば、B や C の善を高めることも必要になる。

しかし實際上、この見解は擁護できない。「天使のような人々」からなる世界ならばいざ知らず、現実の世界では明らかに、善は—グリーン流の善の概念でさえ—競合することもあるだろう。A の自己実現によって B の自己実現の機会が奪われることは、確かにある。また A が良心に従って行動する場合でさえ、それによって間接に B は良心に反する行動に促されることもある。善

4) T.H. グリーン『倫理学序説』詳細目次, xxvi 頁, 199 節。

の構成要素として幸福なども考慮すれば、この競合性はさらに明白になる。すなわち経験が示すように、A の善を増加させるためには、他の人々の善を減少させなければならないことが**確かにある**。

このことは、ある非常に重要な議論につながってゆく。さまざまな善の主体は現世では対立せざるをえないので、そうした結末にならないような来世が存在しない限り、それらの主体はやはり全体として対立せざるをえない。ところがある人々の意見では、善のさまざまな主体が全体として対立しあうことを認めるのは、互いに矛盾する 2 つの命題を認めることである。シジウィックは、彼自身そう明言しているように、人は他者の善に配慮せずに自分の善を追求すべきだということ [利己主義] と、人は自分の善に配慮せずに社会全体の善を追求すべきだということ [功利主義] が、同等の説得力をもつ 2 つの道徳的指令であると直感し、認識した。これは次のことを含意する。すなわち彼は、A は自分の善を他のもののためにけっして犠牲にすべきでないと主張しながら、B についても同様のことを主張しているのである。この 2 つの命題は、自分の善および他者の善の追求が、その人に同じ行動を指令する場合にのみ互いに整合的である。こうしてわれわれは（他の諸問題はさておき）これらの命題を和解させる必要性が、来世の存在を仮定するための十分な理由になりうるのか否か、という問題に直面する⁵⁾。

この議論をムア氏は激しく攻撃している。すなわち「ある人物の幸福が**唯一の善**であるべきだということと、全員の幸福が**唯一の善**であるべきだということは、矛盾であり、この矛盾は、ある行動が両者を同時に実現するという仮定によって解消できるものではない。人々がその仮定の正しさをどれほど確信していようとも、それはやはり矛盾である」⁶⁾。私は、シジウィックに対するこの反論は的外れではないかと思う。はたしてシジウィックは、「私のもつばら A さんの幸福を追求すべきである」という命題が、「A さんの幸福は唯一の善である」という命題に必然的に変換可能であることを認めていただろうか。ムア氏におおむね賛同するラッセル (Russell) 氏でさえ、「善」と「當為

5) 『倫理学の諸方法』(H. Sidgwick, *Methods of Ethics*, 1874) 最終節を参照のこと。

6) 『倫理学原理』(G.E. Moore, *Principia Ethica*, 1903) 103 頁。

(ought)」の関係をめぐるムアの論理上の立場については批判しており⁷⁾、私もラッセルの批判は当然であると思う^[3]。

しかし実のところ私は、ここでシジウィックを擁護しようとしているのではない。というのも、シジウィックは先ほどの矛盾を解消するために、来世の存在を仮定する必要があると示唆したわけだが、私の見地からはそもそも、そのような矛盾はまったく存在しないからである。私は他者の善に配慮せずに自分の善を追求すべきであるとは思わないし、私はどんな人についても、先ほど定義したような意味でその人自身が目的であるとは見なさない。

ひょっとすると、「他の人々の所有する善の量がどれほどであろうとも、けっして奪われることのない善の所有を要求する」という意味では⁸⁾、だれもが目的であるかもしれない。しかしこれはただ、人々の社会関係としての公平(fairness)も善の1つの構成要素である(私自身はこのように考えていないし、意識状態のみが最終的な善悪の構成要素であるならば事実問題としてこのようなことはありえない)、と主張しているにすぎない。だからこれは、どんな場合にでも矛盾しうる前述のAやBに関する命題を含意していない。それゆえ私の見地からは、各人の善が競合しあうという主張は、矛盾していない。したがって、その主張に反論する理由はまったくないし、またこのような線に沿って、来世の存在を論証する有効な議論を組み立てることもできないのである。

7) 『インディペンデント・レビュー』(*Independent Review*) No.6, 330頁。

[3] ここで言及されたラッセルの書評は、残念ながら日本国内のどの図書館等にも所蔵されていないようである。しかしムア『倫理学原理(改訂版)』[Moore 1993]の編者ボールドウィンが編者序文で次のように言及したのは、おそらくこの問題だろう。「…『倫理学原理』でムアは、功利主義の原理を用いて、内在的価値[善]から義務[当為]を定義している(第89節)。ラッセルは『倫理学原理』の書評において、これは誤りであると論じた。なぜならここに提示された義務の分析に対しては、ムア自身が示した内在的価値の分析不可能性の議論がそのまま適用されるからである。そしてムアも直ちにこの意見を受け入れた」。

8) マクタガート『宗教のドグマ』(McTaggart, *Some Dogmas of Religion*, 1906) 17頁。

解題

1. 若き日のピグーの信条

ケンブリッジ大学キングズ・カレッジのフェロー資格を得るために、ピグーが 1900 年に『宗教教師としてのロバート・ブラウニング』[Pigou 1901a] を同カレッジに提出したという事実は、当時の彼の最大の関心が哲学・倫理学の分野にあったことを如実に示すものである。このときは不幸にも落選したが、翌年に改めて経済学の論文『過去 50 年間におけるイギリス農産物の相対価格変化の原因と結果』[Pigou 1901b] を提出し、これによって彼は 1902 年にフェローの資格を取得した。

もし 1 回目の申請でフェローになっていたならば、ピグーは哲学・倫理学の道に進んでいたかもしれない。もしそうであるならば、そのときの失敗が彼を経済学の道に導いたと言えるのであり、この一連の過程において、おそらくマーシャルの「個人的な励まし」(personal inspiration) が、ピグーの決断に相当大きな影響を及ぼしたものと推測される。ピグーはケンブリッジ大学経済学教授に就任したさいに、自分が経済学者になった事情について触れたが [Pigou 1908b: 7]、幾分曖昧な表現であるため、その詳細は不明である。しかし彼にとって経済学の道に進むことは、(少なくとも当初の時点において) 必ずしも自発的選択でなかったように思われてならない。

いずれにせよ、ピグーは 1908 年の教授就任を境に、経済学研究に専念し、哲学・倫理学に関する本や論文をほとんど書かなくなる(唯一の例外は「詩と哲学」[Pigou 1924] である)。それゆえ論文集『有神論の問題』[Pigou 1908a] は、この重要な転機の年において、彼の元来の最大の関心事だった哲学・倫理学研究の総決算を試みた本であると見なすこともできる。すなわち同書は、若き日のピグーの信条を最もまとまった形で示すものであり、章立ては以下のようになっている。なお、その序文では「私が採った哲学上の立場について、私は主に故シジウィック教授の諸著作に負っている」と述べられており、それゆえピグーの基本的立場は、当時の最新の動向も考慮しつつ、主にシジウィックの倫理学の発展をめざすものだったと考えてよからう。

- 第 1 章 実在の一般的性質 (The General Nature of Reality)
- 第 2 章 有神論の問題 (The Problem of Theism)
- 第 3 章 自由意志 (Free Will)
- 第 4 章 善の問題 (The Problem of Good)
- 第 5 章 福音書の倫理学 (The Ethics of the Gospels)
- 第 6 章 ニーチェの倫理学 (The Ethics of Nietzsche)
- 第 7 章 ブラウニングとメレディスの楽観主義 (The Optimism of Browning and Meredith)

同書に示された思想は 1908 年以後のピグーの経済学にも底流として流れ続けている、と考えるのが自然だろう。同書の存在自体は、むろん以前から知られていたが、その内容にまで踏み込んだ研究は、私の知る限り、世界的にもほとんど皆無である。すなわち上記の諸章のうち、第 4～6 章については、本郷 [2007: 31-55] によってやや詳しく取り上げられたことがあるものの、残念ながらそれ以外については、未だにほとんど手つかずの状態にあると言ってもよい^[4]。

2. 「善の問題」

論文の構成はおおよそ下表の通りである。

[4] ピグーは名門バプリック・スクールの 1 つであるハロウ校 (Harrow School) の卒業生だが、当時の彼については、これまでほとんど何も知られていなかった。このたび同校に赴き、記録文書などを精査した結果 (アーカイヴィストである Rita Boswell 氏の協力に深く感謝する)、若干の伝記的事実を確認することができたので、蛇足ながらあえてこの場を借りて、以下のことを報告しておきたい。

①ピグーは特待生 (Entrance Scholar) であった。②ハロウ校は諸々の学寮 (House) から構成されるが、彼は 1888 年創立の Newlands 学寮の生徒であり、赤レンガと木を組み合わせた美しい校舎は今も残っている。③1894 年に監督生 (Monitor) を務めた。④当時の彼の写真が複数残っている (著作権の問題のため、ここに掲載することはできない)。⑤当時の同校の定期行物 *The Harrovian* には “ETON V. HARROW by Arthur Cecil Pigou, 1897” と題された詩が掲載されており、これは毎年夏におこなわれる両校のクリケット試合 (世界で最も古い伝統を誇るクリケット試合の 1 つとされる) を称えたものである。

I 善の研究方法	善を把えるには主に次の 2 つの方法があり、ピグーは、①を採ったグリーンらを批判し、②を支持する。 ①事物の性質からの演繹的推論 ②直接的知覚
II 善の構成要素	(i) 善は意識活動の状態のうちに存在する。 (ii) ムアの「有機的善」論に対する批判。 (iii) 善の構成要素 (快楽・善意・愛) をめぐる諸学派の対立 (iv) 善の多変数関数
III 個人間の対立	(i) ある人の善の増大は、他の人の善の減少をもたらすことがある。 (ii) ムアは、シジウィックの議論 (自己の善の追求 [利己主義] と社会全体の善の追求 [功利主義] の対立を調停するには、来世を仮定する必要がある) を批判したが、この批判は的外れである。

ここでは、本郷 [2007] で触れなかった、あるいは十分に強調しなかった、2 つの論点を簡単に補うだけに留めたい。

第 1 に、第 II 節では 3 つの倫理学説 (本稿 192-93 頁) を総合するために、ピグーは「善」を以下のような多変数の関数に喩えて説明する。

$$\text{善} = F(a, b, c, d, e, f)$$

a : 快楽

b : 善意

c : 愛

d : 人が抱く理想の性質

e : 人や事物のうちに見出される性質 (その対象の知覚できない真の性質は無視してよい) に対する姿勢

f : その姿勢が愛情や善意でない場合には、人が自分自身のために立てた目標に対する情熱

この善関数は以下のような性質をもつ。

(1-a) 快楽の増大は、常に善を増大させるわけではない。

- (1-b, 1-c) 愛や情熱の増大は、対象をそれにふさわしいものと勘違いしていたのであれば「善」を増大させるが、ふさわしくないものと承知していたのであれば「善」を減少させる。
- (2-a) 快樂の符号が負であっても、「善」の符号は正になりうる。
- (2-b, 2-c) 善意の符号が正であっても、「善」の符号は負になりうる。善意の符号が負であれば「善」の符号もたいてい負になるが、例外もありうる。
- (3-a) 他の条件が等しい限り、ある任意の変数の値が増加するにつれて、その変数のさらなる 1 単位の増加によって生じる「善」の限界の増分は逡減する。

(1-a) と (2-a) が明確に示すように、あえて苦痛に向かう行為も「善」になりうるので、ピグーを功利主義者であると断定することは難しい。例えば、非自発的な「飢餓」と自発的な「断食」を区別する A. センの有名な議論があるけれども、そのような区別は前述のピグーの立場からも可能だろう。また J.S. ミルと異なり、ピグーの場合、快樂自体の「質」的多様性は認められないが、こうした「質」の問題は、たとえ快樂が同じ大きさであっても他の変数 $b \sim f$ のあり方によって「善」の大きさが異なってくる、ということから説明可能だろう。

また (3-a) は、むろん次のことを前提するものである。すなわち、他の条件が等しい限り、ある任意の変数の増加は、通常は「善」を増加させる。ただしこのような単調増加性は常に成立するわけではない (1-a, 1-b, 1-c)。

さて、第 2 の問題に移ろう。第 III 節の後半部分においてピグーは、ムアによるシジウィック批判が的外れであると主張しているけれども、これは一体何を意味するのだろうか。それは難解な議論であるが、価値論（善とは何か）と規範論（何を為すべきか）の関係を問うていることは間違いない。すなわちムアの倫理学では、価値論上の善（目的）が定めれば、それに対応して規範論上の当為（手段）も定まる。しかしムアの倫理学の特徴の 1 つであるこの帰結主義は、果たしてピグーによるシジウィックの倫理学の解釈にも適用できるだろうか。これが問題である。

一般に倫理学では、次の 2 つの立場、すなわち善をどれだけ促進させたかという行為の結果を重視する帰結主義と、行為の動機自体を重視する動機主義との対立が知られている。例えば周知のようにカントは、「仮言命法」（何らかの目的のための手段としての正しい行為を命じる当為）と「定言命法」を区別したうえで、後者を道徳原理として提示した。このような二分法の観点から見るとき、果たしてシジウィックは帰結主義の立場を一貫して守ったと言えるだろうか。また同様の二分法の観点から、第Ⅱ節で挙げられた独立変数（快楽・善意・愛・情熱など）を見ると、ピグーについてもやはり同様の問題を提起せざるをえない。すなわち容易に気づくように、それらの変数には、帰結に関する変数と動機に関わる変数が入り混じっている。もし善という従属変数の帰結のみに注目するならば、なるほど従来の定説通り、ピグーは帰結主義者であると言えるけれども、彼の狙いがこうした帰結主義の立場からの統一にあったのか否かは、残念ながら現段階では不明である。

この難問に取り組むにあたり、少なくとも次の 2 点に留意する必要がある。すなわち第 1 に、ピグーをどう解釈するかという問題は、シジウィックをどう解釈するかという問題と密接に関連している。第 2 に、個人レベルの行動に関する倫理思想と社会レベルの（政策）行動に関する倫理思想の峻別であり、行動の「動機」が重要な位置を占めるのはもっぱら前者に限られるだろう。もしそうであれば、『有神論の問題』[Pigou 1908a] の倫理思想と『富と厚生』[Pigou 1912] の倫理思想を峻別することが可能であるかもしれない。その場合、ピグーは狭義の倫理学者としては、必ずしも功利主義者であるとは言えないが、経済学者としては、大まかに捉えるならば功利主義者であると言えるだろう。

参考文献

- Moore, G.E. [1993] *Principia Ethica, revised edition, with the Preface to the 2nd ed., and other Papers, edited and with an introduction by Thomas Baldwin*, Cambridge: Cambridge University Press. (泉谷周三郎・寺中平治・星野勉訳『倫理学原理（改訂版）』三和書籍, 2010).

- Pigou, A.C. [1901a] *Robert Browning as a Religious Teacher. Being the Burney Essay for 1900*, London: C.J. Clay and Sons.
- [1901b] “The Causes and Effects of Changes in the Relative Values of Agricultural Produce in the United Kingdom during the Last Fifty Years”, A.C. Pigou Collection (ID code: Pigou 1/3), Marshall Library of Economics, University of Cambridge.
- [1906] “The Ethics of Gospels”, *International Journal of Ethics*, 17: 275-90.
- [1907a] “Some Points of Ethical Controversy”, *International Journal of Ethics*, 18: 99-107.
- [1907b] “The Ethics of Nietzsche”, *International Journal of Ethics*, 18: 343-55.
- [1908a] *The Problem of Theism, and Other Essays*, London: Macmillan.
- [1908b] *Economic Science in Relation to Practice*, An Inaugural Lecture given at Cambridge, 30th October, 1908, London: Macmillan.
- [1912] *Wealth and Welfare*, London: Macmillan. (八木紀一郎監訳／本郷亮訳『ピグー 富と厚生』名古屋大学出版会, 2012).
- [1920] *The Economics of Welfare*, London: Macmillan, 1st ed., 1920, 2nd ed., 1924, 3rd ed., 1929, 4th ed., 1932. (永田清監修／気賀健三・千種義人・鈴木諒一・福岡正夫・大熊一郎訳『厚生経済学（第4版）』東洋経済新報社, 1953).
- [1924] “Poetry and Philosophy”, *Contemporary Review*, June 1924: 735-44.
- 本郷亮 [2007] 『ピグーの思想と経済学 —ケンブリッジの知的展開のなかで—』名古屋大学出版会.
- 山崎聡 [2011] 『ピグーの倫理思想と厚生経済学 —福祉・正義・優生学—』昭和堂.